

学会創立20周年記念特集

想い出すほどにクロマトグラフィー科学会

今井一洋

年を取ると、「昔のことははっきり覚えているが最近の出来事はすっかり記憶にない、ということが屢々起こるものである」、といわれている。私の場合は、高齢者にも拘らず、最近の出来事についての物忘れが激しいかというところでもない。しかし、昔のことはすっかり忘れてしまっている。大変目出たいことであるクロマトグラフィー科学会の創立20周年に当たって、なにがしかの思いを述べよとの編集部からの要請があったときに、はたと困ったのは会長就任当時のことが鮮明に想い出せないことであった。

幸いなことに、設立当初から本会に関与されていた千田正昭氏（当時日本分光株式会社）から学会事務局に資料があることを教えられ、竹内豊英氏（岐阜大学工学部）より当時の事業報告等の記録のあるCDを頂くことが出来た。それを見るうちに臍（おぼろげ）ながらも記憶が蘇ってきた。

私が5代目の会長をお引き受けした当時は、設立の苦しみを味わった初代奥山典生会長から、2代鴈野重威会長、3代谷村徳徳会長、4代本田進会長に至るまでに各会長、役員、会員の努力により、学会のクロマトグラフィーの分離論的基盤固めが漸く成し遂げられ、これから応用面での展開が必要とされる時期であったのではないかと推察される。というのは、クロマトグラフィー科学会の存在すら知らず、「薬学」という実学の世界の人間であるというだけの理由で、私が会長に推挙されたのであるから。

幸運にも、クロマトグラフィー科学会の実情を良く知る事務局長の磯辺俊明氏に全てをサポートして頂き、学会の運営もスムーズに行うことが出来た。私が唯一行ったことは、科学会議の開催場所（東京大学安田講堂）を確保したことで

あった。当時会員数が600名弱であり、会員拡充のための方策も検討した。まず学生会員を増やすことが決められ、教室所属の学生を学生会員にすることを大学所属の会員に呼びかけたりした。現在クロマトグラフィー科学会が、日本学術会議、日本化学連合に所属する有数の学会として活躍していることを考えると隔世の感がある。歴代の役員、会員諸氏の努力が、クロマトグラフィー科学会の継続と現在の発展に寄与してきたと考えられ、ここに敬意を表するものである。

一方で私自身は、本会の運営に関与することで、クロマトグラフィーシンポジウム、クロマトグラフィー科学会議への参加の機会が増え、HPLC-化学発光検出法、蛍光誘導体化-HPLC、光学分割-HPLC等の発表をさせて頂いた。そのお陰でグループの研究成果も実り多いものとなり、現在の蛍光誘導体化 HPLC-MS/MS による新規プロテオーム解析法の開発と展開[1-3]が可能となった。乳がん転移に関するタンパク質の流れを提案出来た[4]のも、クロマトグラフィー科学会の存在の賜物である。改めて感謝申し上げる次第である。

- [1] C. Toriumi and K. Imai, *Anal. Chem.*, **2003**, 75, 3725-3730.
- [2] M. Masuda, C. Toriumi, T. Santa and K. Imai, *Anal. Chem.*, **2004**, 76, 728-735.
- [3] T. Ichibangase, K. Moriya, K. Koike and K. Imai, *J. Proteome Res.*, **2007**, 6, 2841-2849.
- [4] K. Imai, T. Ichibangase, R. Saitoh and Y. Hoshikawa, *Bio-med. Chromatogr.*, **2008**, 22, 1304-1314.